



文学部長

↑生田3号館の研究室にて

# 道家英穂 教授

## 新任教員の頃と現在

### —学生たち、育友会との関わり

どうけ ひでお

1958年岐阜県生まれ。1981年早稲田大学第一文学部卒業。1987年東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。主著として、『死者との邂逅—西欧文学は〈死〉をどうとらえたか』（作品社、2015年）、ロバート・サウジー『タラバ、悪を滅ぼす者』（翻訳、作品社、2017年）、『岩波講座 文学 12 モダンとポストモダン』（共著、岩波書店、2003年）。NHK「チコちゃんに叱られる！」に「クリスマス」のテーマで出演（2019年11月、2021年12月）。

この9月1日に文学部長に就任した道家英穂と申します。私が専修大学に入職したのは今から35年前、29歳のときでした。それまでは大学院にいて、院生の身分からいきなり本学専任講師となりました。世間知らずだった当時を振り返ると恥ずかしくなりますが、専修に勤めた最初の数年間は私の人生のなかでも特に楽しく思い出深い時期でした。

### 新任の頃

学部を卒業してから就職するまで6年間大学院に在籍していました。現在は博士論文を書いて学位を取得するのが一般的ですが、当時、文系の大学院での博士号取得は少なく、英文科ではそういう事例はありませんでした。だから今より楽だったはずですが、私の場合は英語で修士論文を書くのに一苦労で、

博士課程に進んでからも英文学の原書や論文と格闘する日々でした。それが就職してみると、学生たちが親しげに声をかけてきて、私の人生にも遅い春が訪れた気がしました。

そのころ教職員食堂は学生食堂の2階にありました。ある日、昼休みに食堂に行くと、2年のクラスの学生がいて「先生、また上でおいしいもの食べるんですか、たまには僕らと一緒に食べましょうよ」と学生食堂に引きずり込まれました。中に入るともう一人が「先生、先生、こいつあそこにいるあの子のことが好きなんですよ」と言うので、「そうか、じゃあ隣に座ろう」とそちらに向かおうとすると、「待ってください、先生、そんなこと急に言われても心の準備ができてません」と必死になって止められました。英文科には女子学生が多かったにも関わらず、あるいはそのせいで気後れしてしまうのか、当時の

男子学生は奥手でしたね。私は、その後ゼミに入ってきた彼らを鼓舞しようと「俺は女子にはもてないけれど、友達が多い」とか「恋愛より友情が大切」なんてことを言っているうちはダメだ」と説教していました。その甲斐あってか、なかなか心の準備ができないN君にも4年の後期になって彼女ができ、何人かで拙宅に遊びに来たときに連れてきました。そして「先生も早くいい人を見つけてくださいね」と言って卒業していきました。それまで私は女子学生とも良好な関係を築いていて（少なくとも私自身はそう思っていて）、大学では楽しく過ごしていましたが、気がついたらいい歳をして交際相手もおらず、焦燥感にかられました。当時、結婚しない女性は自立していると見られましたが、結婚しない男性に対する世間の風当たり、身内からのプレッシャーは非常に強いものがありました。結局35歳のときに結婚しましたが、その後すぐ、学生時代から順調に愛を育んだN君の結婚披露宴に主賓として招かれました。そのときは喜んで出席しましたが、結婚に関してわずか数か月先輩の私にうまく主賓が務まったのか、今から思うと全く自信がありません。

## 現在の学生たち

専修の学生は昔から人なつっこくとも礼儀をわきまえていましたが、時に授業中、私語をやめない学生に厳しく注意することもありました。ところがここ数年、そういうことはありません。最近の学生はとてもまじめです。担当している1年生の入門ゼミでは、環境問題や情報化社会など時事的なテーマを扱った英語のテキストを使い、各課を数人のグループに割り当ててプレゼンテーションをさせていますが、学生たちは教科書以外の資料も調べてきて、熱心に取り組んでいます。かつては授業中に質問すると、蚊のなくような声で答える女子学生がいましたが、今は男子も女子も堂々とプレゼンするし、発表者以外の学生に意見を求めても皆しっかり自分の考えを述べます。また専門の講義では、レスポンスという教育支援ソフトを使い、授業内容についての質問やコメントを書かせていますが、的を射た質問やコメントが多く、知的好奇心の旺盛さに感心します。

ただ試験をするとこちらが期待するほどできてい

なくて「あれ？」と思うことがあります。昔の学生は普段は遊んでいるようでも、試験になると一生懸命勉強しましたが、今の学生はずっと平常心のまま試験に臨む傾向があります。でもここぞという時にがんばる姿勢も必要ではないかと思います。

またレスポンスのコメントは面白いのにレポートや卒論になると論理的な文章がうまく書けない学生がいます。SNSの普及で発信力は増しましたが、息の長い文章を書く経験が少なくなっているのでしょうか。論理的な文章の作成は、社会に出てからも大事な素養だと思うので、大学生のうちをしっかり身につけてほしいです。

## 育友会との関わり

私は入職3年目から、育友会の支部懇談会に出張するようになり、ほぼ毎年参加しています。若い頃は自分の親のようなご父母を前にとっても緊張しました。ご父母の年代に近づくにつれ緊張は解け、同年代に達する頃には出張が楽しみになりました。コロナ禍で過去2年間は通常どおりの開催が見送られましたが、今年は役員の方々のご尽力により多くの支部で開催されました。来年はコロナが収まって全面復活するよう祈っています。

専修大学は他大学に先駆けて、この組織を立ち上げ、保護者との交流を図ってきましたが、かつては現在のようにシステムが整っておらず、相談を受けても出張者では対応しきれないことがありました。今ではそういう場合、所轄の部署や担当教員に連絡が行き回答するようになっていきます。保護者の方々におかれましては、是非支部懇談会を活用していただきたいと思います。また何かご相談がありましたら、夏の懇談会を待たずとも育友会や学生相談室にご連絡ください。

新任の頃、学生とは友達のような関係でしたが、今も友達のような関係です（と私の方は思っています）。学部長としては微力ながら、ご子息ご息女が、卒業のときに大学での学びによる成長を実感でき、専修大学に来てよかったと思えるよう努めてまいりたいと考えています。今後ともご支援の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。